

念に調べたこと
とで知られる
アメリカ生ま
れのカナダ
人、ジェーン

演劇や音楽で知られる文化の街、東京・下北沢がいま「都市再開発」の波に襲われようとしています。六月三十日、世田谷区でおこなわれたシンポジウム「都市／CITYを構想する」

院生、学生、ジャーナリスト、市民が一堂に会し、社会的連帯を感じさせる集会でした。会場には日本共産党の中里光夫区議の姿もありました。

二百人の聴衆を前に、著名な経済学者の宇沢弘文東京大学名誉教授が「ジェーン・ジェイコブスと社会的共通資本としての都市・下北沢」と題して基調講演をおこないました。(写真)

世田谷区が強硬に推進を

表明している「地区計画原案」には、下北沢駅前の店を立ち退かせて幅二十六メートルの道路をつくることや敷地をまとめれば十七階建てビルが建てられる規制緩和などが盛り込まれています。下北沢を守ろうと立ちあがった人たちは、一万八千人の署名を集めたり、駅前ライク・パレードを展開、「市民代替案」も発表し、話し合いの場をもつよう区に求めています。区は計

無残な破壊耐えられない

大変ショックと宇沢弘文さん講演



宇沢弘文

画を見直す意向を示していません。

宇沢さんは、下北沢周辺で学生生活を送った六十年前を振り返りながら、「下北沢を街の理想と考えることができました。そこに道路をつくるときいて大変ショックをうけました」とのべ、一九九〇年代のヨーロッパが、街から自動車を追放し、人がゆっくりと歩ける街づくりを推進した背景には、アメリカ的な開発で街を壊してきたことへの危機感があったと指摘しました。

また、人間的な魅力をそなえ、住みやすく、文化の薫り高い都市とは何かを丹

・ジェイコブス(一九一六—二〇〇六)が示した四大原則(①道は狭く折れ曲がり、一ブロックが短いこと②古い建物や新しい建物がまじりあっていること③文教地区と商業地区を分けるようなゾーニングをしないこと④人口密度はできるだけ高い方がいいこと)を紹介しました。

独立行政法人化以降、日本の大学にも醜悪な建築がさらに増えていると憤りつつ、宇沢さんは講演の最後に、「下北沢という精神のシンボルが無残に壊されるのは耐えられない。道路をもつてこないようにしてください。私もできることがあったら」とのべました。

栃木県から参加した若い人も発言し、下北沢が都民だけでなく、日本の代表的な文化の街として認識されていることを感じました。宇沢さんの講演後におこなわれたシンポのパネリスト(佐々木葉、高橋ユリカ、町村敬志、養原敬、吉見俊哉の各氏)と参加者との討論も、下北沢らしさを持続させるために、どうすることが必要なかを真剣に考えている様子が伝わってきました。まちづくりに民主主義が徹底される流れをつくっていくためにも、下北沢を守る運動への支援が求められていると思いました。

(松田繁郎)